

昭和五十四年五月一日 ご講演

「貧しさと豊かさ」

ただ今、山岡先生（山岡喜久男理事）から大変高く評価されたご紹介をいただきまして、まことに心苦しう思っております。お話を聞いて下されば、私がいかに学識のない者かというようなこともよくお分りになると思いますので、まあ、聞きづらいかもしれませんが、しばらく私のつたないお話を聞いて下さればありがたいと思えます。なお私は、大学で講義するとか、そういうことをした経験がございませんので、長く立っていることが苦手なので、体重も重うございまして、申しわけないんですけれど、すわらせていただきながらお話させていただきます。

お話しすることの喜び、ためらい

実は今日、こちらにお話をたのまれました、まあ一方において大変喜びました。と申しますのは、私のすぐ近所に住んでおりまして、一体あの屋敷の中はどうなっているのか、と、実はかねてから好奇心一ぱいだったんですけれど、なかなか入るチャンスがなかったのですが、

ただ今入ってまいりまして、本当にすばらしい雰囲気のあることを知りまして、驚いていられるわけです。お話をたのまれました、もう一方において、躊躇いたしましたと申しますのは、私やはり宗教家ですので、どうしても宗教くさいお話になってしまい、おそらく皆さんには大変聞きづらいお話しか、あるいは話し方になってしまおうのではないかと思つて、躊躇いたしました。でも少しでもお役にたてるならばと思ひ、はせ参じたわけです。

すでにみなさんとは住みかの近さ、 心の中での親しさ

私は皆さん方が住んでいるこのすぐ近くに、しかも昭和十六年から住んでおります。私が中学生の頃でした。あそこに中学生用の寮がございまして、毎日九段まで朝晩歩いて通ったんです。そしてこのすぐ前に、今でも靴屋さんがあります、当時の靴ですから、すぐに悪く

なっちゃうんで、毎土曜日のようにこの靴屋さんに靴を出しに来て、月曜日の朝直した靴を又はいて、一週間通うというようなことを四年間やりました。

東京カテドラル大司教 白柳誠一先生

さらに皆さん方とは大変親しみ深く感じますのは、おそらくこの中にいる方は決して初めてお目にかかるんじゃないやなくて、前のお寿司屋さんで何回かお目にかかっていると思うんです、と申しますのは、私もあそこに住んでおりますが日曜日には私のところには食事はないんで、どこかに行つて食べなきゃならない。時々この前のお寿司屋さんにもまいります。そうすると塾生さんらしい方々にお目にかかることもありますんで、おそらく何人かの方々にはあそこでもお目にかかっていると思えます。

さらに私がこの和敬塾にとても親しみを感じますのは、ただいま紹介下さった山岡先生がごこの理事をしていらつしやるし、そしてまた前川塾長さん、あるいは奥平先生ともお知り合いになる機会がございまして、そういった意

味でもとても親しく思います。また同時に私の仲間にこの塾を卒業した者が二人いるのです。この塾で生活しながら、一人は学習院だと思えますし、もう一人は早稲田大学に通いまして、それを卒業した後、神学校——いわゆる私どものような牧師・司祭になる学校がございまして、そしてそこで八年間勉強し、そして今私たちといっしょに働いている者が二人いるのです。したがって、本当にこの塾の皆さん方には何となく親しみを感じていたわけなのです。

昨日もこの前を散歩しております。夕方、実は健康の理由によりまして、少し散歩するのですが、昨日の夜八時頃でしたか、あれは空手の人でしょうか、空手部というのがあるのかどうか知りませんが、あるいは柔道でしょうか、何かそろいのユニフォームを着て、あそこ前で「オス」とか何とか言って先輩を送っている姿を拝見いたしました。とても頼もしく思いました。まあ、そういうわけで、皆さん方とは距離的にも、そして心の中でも、大変親しみを感じております。

お話のテーマのヒントは

フィリピンでの極貧のショック

さて今日は、このお話のためにどういうテーマがいいかということ、先日奥平先生の方から「照会がありました時に、なかなかいい考え

が浮かび上がらなかったんですけれども、とっさに何となく「貧しさと豊かさ」というようなタイトルにしておいていただきたいと申し上げました。と申しますのは、実は私昨年のおちようど今頃フィリピンにまいりまして、非常に大きなショックを受けたことがあるんです。それは貧しい姿に接した——思いもよらない貧しさというのを目の当りにしてですね、もうそれはそれは自分でもびっくりするようなショックで、まあそれが原因かどうかは知りませんが、私はフィリピンで病気になってしまいました。来て一か月入院せざるをえなかったほどのショックでした。

文化ショック

まあショックといえますと、文化ショックというのをよくお聞きになったことがあるでしょう。たとえば少し横道に入っちゃいますけど、未開の文明の人たちが文明国に行った場合、あまりの違いに驚いてショックをうけて、もう食事も出来なくなっちゃう、人と話すのもいやになってしまふ、そしてついにノイローゼになったり自殺するというような、そういう極端な例まであるわけです。まあ、私の場合、文化ショックというか、非文化ショックであったかもしれません。

曾野綾子さんのポーランドでの

文化大ショック

そういえば、こんなことも思い出します。ちようど今から七、八年前だったでしょうか、私がある会議のためにローマに行ったことがあるんです。そしてそこへ、「ご存知だと思いますが、作家の曾野綾子さんがポーランドからやって来て、急に私のところに電話をよこしたんです。実は、今私はもうどうにもたまらない、いたたまれない気持ちでいるんですけども、ぜひおつきあい願いたいというのです。彼女は前から知っていたんで、私はびっくりして彼女のところへ行きましたら、「自分は今、ポーランドから帰って来た。しかし、そこであまりにも自分の想像していたものと違った世界に接して、いわば文化ショック的な状況におちいつている。ぜひ気分転換のためにどこか連れて行ってほしい」というわけなんです。ではその彼女が受けた文化ショックというのはこういうことだったんです。

コルベ神父、死刑囚の身代わりとなる

皆さんご存知かどうか知りませんが、あれども、コルベという人がいるんですが、それはポーランド人で、やはりカトリックの神父です。この神父というのはかつて昭和のはじめに日本に

いたことのある人なんです、その人が第二次世界大戦直前にポーランドに帰ったのです。そのころナチスの弾圧が始まりまして、ユダヤ人そしてキリスト者、とくにキリスト教の教職にある人たちの弾圧が始まったわけです。それでのコルベ神父というの捕えられまして、収容所に入れられたわけです。アウシュビッツとか、そういうような名前を聞いたことがございますでしょう。ああいう所へ収容されたわけです。それはそれは大変残酷な取り扱いを受けたわけですね。ですから収容されている人たちは、時々耐えかねて脱走する人がよくあったわけです。ナチスの人たちは、その脱走を防ぐために大変すばらしい名案に気づいたわけです。それはまあちょうどこの寮もいくつかに分かれているようにですけども、囚人たちをいくつかのグループに分けて、皆さんは囚人ではございませんけれど、そのグループからもしも一人の人が脱走するならば、もう文句容赦なくそのグループから十名の者を選び出して、その人たちを死刑にするという案を出したわけです。まあそれで逃走というのでしようか、逃亡を防ごうとしたわけです。あるときそのコルベ神父が属しているそのグループから一人の人が逃亡してしまったわけです。そしてナチスの官憲たちはそのグループから十人の人を選んで、この人たちをいったとおりに死刑に処する。ところ

がその中の一人が、「俺は死にたくない、私には妻も子どもも待っている、どうしても死にたくない」といって、わめき出したんです。そしてそれを聞いていた十人に選ばれなかったコルベ神父というのが「私が代わりましょう」、こういってその神父はその人に代わって死んで行ったわけなんです。それもしかもしも餓死の刑といまして、食べ物を与えないわけなんです。そして十人の人がだんだん死んで行くわけです。そしてコルベ神父は精神力が強かったのでしょう、とにかく最後の九人まで見届けて、そしてなかなか死なないうで、ナチスの人が空気が何かを注射して、殺したんです。

曾野綾子さんは、そのことを取材するためにポーランドへ行つたんです。ポーランドへ行つて調べているうちに戦争が終わって、その身代わりになつてもらつた人に会つたわけです。そして何と身代わりしてもらつた人が死にたくなかつたのは、奥さんも子どももいるから死にたくないといつて神父が身代わりになつたわけですけど、戦争が終わつて帰つて来てみたならば、奥さんも子どもも、もうすでに死んでいたわけです。ですから、いわば考え方によつては無益な死であつたといえないわけでもないわけですね。まあそういったことがまず一つ彼女にはとっても大きなショックだつたわけです。それからもう一つは、そのポーランド

人たちの信仰者の態度というようなものにとつても、大きなショックを受けたらしいのです。

フィリピン人の貧しさ——極貧

まあそれが文化ショックの話から少し変な所へいってしまいましたけれども、とにかく私がフィリピンに行きました、本当にその貧しさというものを知りました。かねてから経済の専門家の山岡先生からよく南北問題のお話をうかがっていました。ご存知でしょう。南北問題というのは、地球の北側の半分、北半球諸国は、だいたい裕福な国なのです。南半球のほうは、だいたい貧しい国で、その間の経済の格差が非常にひどいので、大きな問題になっているわけです。もう一つは東西問題というのがありますね。これはこんどイデオロギーの差によって東と西の区別をいたします。しかし、南北問題は、山岡先生などのお話もかねてからうかがっていて、そのひどい状況については何となくわかつていたつもりでした。あるいは、いろいろな統計とか、いろんな書物を通してわかつていたつもりでした。

会議出席中スラム街に宿して

極貧の實際を肌身で知る

しかし、現実にその場に接してですね、私は本当に驚きました。と申しますのは、これも私

たちの一つの会議だったのです。ちょっと変わった国際会議でして、「アジアの貧困と私たちの課題」というようなテーマで約二週間会議をやったわけですね。私はそのうちの後半の一週間だけ行ったのですけれども、普通ですと国際会議などというのは、ペーパーと偉い学者さんたちのお話を聞いて、あるいは専門家のお話を聞いてそれを元に私たちが討議するというようなのが、普通のケースです。

しかし、この会議はちよつと変わったやり方でして、会議の大部分が「貧しさ」というテーマでしたから、貧しい人といっしょに生活させたわけなんです。参加者をいくつかのグループに分けてまして、ある人はスラム街に泊まり込むんです。ある人は農村に行つて、その農村の本当の貧しい人たちといっしょに一週間生活をする。ある人は漁村に行く。ある人は、失業労働者といっしょに生活をする。そういう経験を約一週間近くやりまして、その経験を持ちよつて、あとの一週間、会議をするというような方法だったわけです。

私はマニラ市内のいわゆるスラムといわれている所に回されたわけです。そこは、アジアでももっともひどいスラム街といわれるトンブという所があります。二〇万人とも二五万人ともいわれるほどの大きなスラム街でした。もう私どもの感覚では、本当に一日でも長くいた

ならば、いたたまれないといましようか、病

気になってしまふというような所です。それを察してかどうかは知りませんが、私たちはそのスラムの真中に住むではなくて、ちよつとはずれた、もう少しいい所に住まわせてくれました。でも、そこに行つてその人たちと話し合つたり、その現場を見て、本当に人間の生きる場はないということをつくづく見たんです。まずその建物たるや、いわゆるボール紙と、そこいら辺に落ちているような木の破片を組み合わせたような家でした。しかも下水もなく、たれ流しであるし、家と家との間は、どぶがたれ流しに流れているわけですね。そして、その住民のほとんどは結核に冒されている。もちろん教育など受ける可能性のある人はほとんどいない。そしてほとんどの人は、失業者である。たまたま職業があつたとしても、その人は一週間のうち一日か二日雇われていって、一日一〇ペソです。一〇ペソといいますが、だいたい一ペソが五、六円じゃないかと思えますから、六〇〜七〇円もらつてくるわけですね。そしてそういう所に限つて、みんな子どもさんなんです。一家族に子どもが七、一〇人なんていうのはざらであるわけです。ですからますますひどい生活になっていっているわけですね。その不衛生たるや、もう私どもですと、こう臭いとその雰囲気にならなくなつてくる。嘔吐をもよ

おすようなひどさです。

スラム街での子供のかせき

そこで、ある時、私はこういう情景にぶつかったんです——子どもたちがコココーラのビンとかビールのビンなんかをもつて来まして、それを一生懸命割っているんですね。こやうやって細かく割っているんです。何しているんだと聞きましたら、実はこれを細かく割つて、七〇kg一袋に詰めて、それを持っていくと、七ペソになるんだそうです。すなわち邦貨で三十三円になるつていうんです。ところが、七〇kgのガラスの破片を集めるということは大変で容易な業でないわけです。しかしそういった空ビンをほうぼうから拾つて来て、子どもたちが、幼い子どもたちが、お金を得るために一生懸命割っているわけです。とにかくそういった子どもの時から本当の貧困のどん底にあるわけです。

マニラの町に行きますと、みなさんきつとお気づきになると思いますけど、自動車が通つているとそこへ子どもがもうとんで来るんですね、ちよつと四つ角で止まったりすると、何を持ってくるかという、たばこを持ってきて一本売りをするわけです。一本買つてくれというわけですね。あるいは新聞を持って来て売りつけるとか、教育どころじゃないわけです。生きていくこと、親子が生きていくためにそういう

かせぎをしなければならぬ。しかも、そういうスラムに住んでいる人たちは、今は大変大きな問題にぶつかっているんです。それは政府の方針によってそのスラム街から追い出されようとしているわけなんです。しかもこれは、私たち日本と無関係でないのです、ちよつと私はそのときに大変つらい思いをしたことがございます。

このスラム街へ日本の公害企業が進出する

——その工場労働者、漁夫らに及ぼす影響

なぜならば、日本の公害を出すような企業がですね、そういう所に今進出してゆくわけなんです。そのためにスラム街の人たちは、みんな追い出されてしまう。もちろん政府は代替地を準備してらんです。しかしその代替地というのは、人里離れた山の中でして、そんな所に行つたならば、今までに一週間に一日か二日あった仕事もなくなってしまう。全くの失業者になつてしまう。ですからみんな行きたがらない。しかし政府はどうしてもそういう貧しい人たちを力で追い出してしまふ。ですからそこに行きますと、日本人たちはだいたいぶつらい思いでいる聞かされます。今日日本では、公害を出す企業というのは、うっかり工場を日本の国内に持つことが出来ません。そのために、外国へ持つていこうとしているわけです。そういうような

事実がたくさんあります。ですから私たちが、貧しい人をさらに圧迫するような原因にもなっているかと思ひますと、大変つらい気持ちになるわけですね。またそのフィリピンで見ましたのは、ストライキをして工場をクビになったというような人たちに、たくさん会いました。と申しますのは、フィリピンでは今、労働組合をつくるのが禁じられているわけです。まあそういうふうには本場の経済的な貧しさというのが、いろんな制度上の不備やたくさん原因からくるものがあるわけです。又あるとき私は漁師さんたちの家へ招かれて行きました。行きましたら、ぜひ話をきいてほしいというので、一緒に食事をしたんですが、そしたら私たちがそこへ行くということが、すぐ警察に知れてしまい、私たちが食事をしていた回りに何人か私服の警官が来てしまった。それで私たちは、まあこれ以上ここにいたらこの人に迷惑をかけるだろうというので、途中で出てしまいました。やはりその人たちも日本の企業が入ってくるので、今海岸から追いたてをくっているが、その家族は非常に勇気をもってそれに反対運動していたために何回も投獄されている人でした。

東南アジア一般・南米・アフリカの貧困

世界三分の二の飢餓、高い文盲率

まあとにかくそのように私が想像できないその貧しさというものがまだ世界の各地にあるということなんです。何もこれはフィリピンだけじゃありません。東南アジア一般にいわれることであり、そして又南米、アフリカなど、たくさんの方にこの貧困というものがはびこっています。実は今年もこれから今月半ばからタイとインドに行くんです。それは同じ経験を他の国でやろうという計画がございまして、タイとインドの貧しい人たちと生活を共にすることになっていきます。皆さんご存知だと思うんですけども、現在世界の三分の二以上の人が飢えているといわれています。これは私たち想像しできませんけれど、現実には統計上世界の人口の三分の二の人が食べる物がなくて困っている。今この瞬間でも、食べる物がなくて困っている人たちがそんなにたくさんいるということ。これは私たちにとって本当にショックなことだと思ひます。この物質的な貧しさというのは、他の面にも現れてきます。たとえば、文盲率ですね。読み書きが出来ない人たちが。日本は特別その点では進んでいる国でして、おそらく九九%読み書きが出来るといふかと思ひますけれど、アジアの諸国では、細かいことはよくわかりませんが、何%ぐらいでしょうか。おそらく良くても五〇%、六〇%の人ぐらいしか読み書きが出来ないんじゃないかと思ひま

す。多くの国は、八〇%、九〇%の人たちがまだまだ文盲であるというのではないかと思ひます。

ビルマからの一通の手紙——

小学校建設費の半額寄付依頼

実は、今日ちようど出かけて来る前に、一通の手紙をもらいました。これはおもしろいんですが、おそらく国際事情を反映していたと思います。中身はビルマの人からの手紙なんです。しかし、これはタイから出ているんですね。まあビルマは社会主義国ですから、おそらく検閲などあつてむつかしかつたのかもしれないせん。そしてその手紙の内容を読んでみましたら、実はこういう南にこういう町があつて、そこには学校が一つもないのだと。かつてこの町は、第二次世界大戦の終わりに日本軍が来てそのほとんどを破壊してしまつた町であつたし、あつた学校もつぶれてしまつた。昭和二十年に戦争が終りましたが、この手紙の主は、ごく最近そこへ行つたら昔のまま、未だにその子どもたちは教育も何にも受けていない。もしも出来るなら学校を作るために援助してもらえないか——これは私のよく知っている、ラングーンの大司教をやっている人です。しかも学校建てるのに、二百万円あれば出来るというので、ちよつとよくわかんないですけども、そのう

ちの半分送つてくれれば、あとは自分たちで何とかすると。とにかくそういうふうな学校の建設すら出来ない、勉強する機会すら与えられないわけです。しかもそれは、小学校の一番の基本的な授業が受けられないでいるわけですから。

ベトナムの小学生、掘建て小屋で

みかん箱机で勉強

かつてベトナム戦争が激しい時に、私は南ベトナムの難民の所へ行つたことがあるんです。そこでもそういう場面に遭遇しました。みんなその何ていうんでしょうか、こういう机がないんですね、地面に小さなみかん箱のような物を持つて来て机にし、三人ぐらいの小学生が両横と前から勉強しているんです、掘建て小屋です。ですから私たち日本の者がどれほど恵まれているか、それに反して他の国の人たちがまだまだそういういった教育の面でもどれほど苦労しているかということがわかります。

日本の豊かさ——

路傍にまだ使える廃品の山

まあ一方、これに反して、私たちは大変豊かな生活をしているわけです。その国の豊かさというものは、町のゴミを見ればよくわかるといわれます。銀座の裏通りを私は歩いたことは

ございませんけれど、歩いたならばおそらく食べ物でいっぱいだろうと思ひます。或いは私たちがよく目にしますこの目白通りだつてそうですけれども、よく朝早く歩きますと、そこいら辺にテレビが出ていたり、或いは冷蔵庫が出ていたり、とにかくまだまだ使えそうな物がたくさんよく出ています。私の関係しているのに「蟻の町」というのがあつたんです。そこへ行きますと、家はあんまりきれいでないんですけども、中はすごくりっぱなんです。すばらしい物がたくさん置いてあるんです。どうしてこんなにすばらしい物がたくさんあるのかといつたら、これみんな廃品ですといわれました。みんな使えるものが、無造作に捨てられていくわけです。それほどまあ豊かな生活といひましようか、無駄の多い生活といひましようか、しているわけです。ですからあのオイルショックの時には、大変だつたんですね。今までのそういう生活が一遍にだめになつちやうかと思つたときの、あの時の日本人のあつて方というものは、大変なものだつたと思ひます。

国も人も豊かなものは豊かさに慣れ物を

大切にせず、貧しいものは貧しさに飢え

——ギャップが大きくなる

私たちは、もう豊かさに慣れきつてしまつて

いて、ちよつとでも生活の質が落ちると、もう我慢出来なくなっているわけです。一方において世界の片隅ではそれほど困っている人がいながら、私の生活がこれほど豊かで、これほど無駄の多い生活をしているのかと思いますと、何となく自分の心を痛めるといいますか、罪の意識すら感じられることがあります。そして豊かな人たちは、ますます豊かになっていくわけです。開発国、開発された国についていうんですか、*developed country* というのは、どんどん豊かになっていくわけですね。一方において、開発途上の国というのは、なかなか貧困がなくなっていない。かえってそのギャップが大きくなっている。こういった所は、本当は山岡先生にうかがうのが一番適当だと思えますけれども。そして、その豊かな国の人たちは、ますます物への執着が強くなってくるわけです。

ドイツの小学生に将来の希望をきく。

日本ではどうか

今小学校の子どもたちに「君たち大きくなったら、どうするんだ」と聞いたなら、きつとこういう返事が返ってくると思うんです。それは、かつて私は今から二十年ぐらい前にドイツで子どもたちといっしょに生活したことがあるんです。ちょうど夏休みに行く所がなくて、ドイツに行ったんですね。ヨーロッパにいますと、

夏休みは自分たちの寮にすることが出来ないんです。どっかに行つて、安く生きなきゃならないもんですから、ドイツなら安く生きられるだろうと思つて行つたことがあるんですが、ドイツ語が何もできないんで、子どもたちともつぱら遊んだわけです。そして「君たちは大きくなつたら何になるんだ」と言つたらですね。私は大きくなつたら、中学校を卒業したら、工場へ行つてフォルクスワーゲンの車を買つて、そして大きな家を造つて、というような何か小学生がですよ、マイホームを夢見ているような発言をするわけです。何かものの執着というのがもうそんな子どもの頃から始まつていることを、そのとき大変恐しく感じたものでした。私たちの世界でも、いい建物を造りたいとか、或はインテリアをよくしようとか、或は美しい着物を着ようとか、すばらしい食器をそろえようとか、いろんな趣味も出てくるわけですね。レジャーも大型になってきました。この間ある人に聞きましたら、趣味というのは、だんだん高じてくると、始め骨董品にいくんだそうですね。そしてその次に絵にいくんですって、最後にたどりつく最高の趣味は、石を集めることだつていうんです。私なんか始めから石を集めてますけれど、小さな石ですけれども、趣味の最高をいつているかもしれない。とにかくまああそういうふうな豊さというものも限りなく、

そして貧しさというものも限りなく現在の世界に共存していることを、私たちはまず見たいと思うんです。

日本の豊かさは、

不法の搾取によつてはならない

そして、ものの豊かさというのは、私は決して悪い事じゃないと思います。そして又、それは働きの、汗の結晶であり、勤勉の賜物であるわけです。しかし、もしも、その豊かさが不法な搾取によつて行なわれているとするならば、これは大きな問題だと思います。一つの結論は、まずそこに皆さんがたに気づいていただきたいということです。決して日本の現在の豊かさが不法な搾取によつて行なわれているとは、私は申しません。しかし、もしもそういう世界の中にそういう分野があるとすると、私たちはそこに注目しなければならぬということ、私たちがまず一つ、第一点として申し上げたかったわけです。

貧しさを救う道——社会の経済・流通機構の改善、軍縮、国連貿易開発会議 (UNCTAD) の活動等

この貧しさというものは、いろんなことによつて改良できるわけです。直して行くことができると思うのです。たとえば、社会のシステム、

社会の流通機構を変えていくとか、いろんなことで社会問題としてとらえ、或は経済問題としてとらえて行くならば、その努力によって改良していくことができるのだと思います。まあ早い話が、今世界で大変なお金を軍備に使っているわけです。日本などは少ないほうで、日本は1%以下だといえますから、世界では一番少ないほうかも知れません。それが多い国になりますと、国家予算の50%近くも軍備のために使っている国があるわけですね、大きな国で。そういう国があるわけでも、これを貧しい人たちの救済に使うならば、まず一つの解決もできるわけです。それよりも何よりもまず、社会のシステムといましようか、機構が変わっていくということが、どうしても必要なことだろうとは思っております。今度山岡先生は、今月の九日から始まるアンクタッド (UNCTAD) という、国連貿易開発会議というのが、とくに開発途上国の問題について取り扱う会議がフィリピンのマニラで行なわれ、その会議にご出席なさるそうでございます。そういうようなことを通して新しい考え方のもとに世界の経済秩序を建て直して行くならば、ある程度これは完成することが出来ると思うんです。

物は人間を幸福にせず

しかし、第二番目に私がどうしても申し上げ

たいのは、物というものが、必ずしも人間を幸福にするものではないということです。かえって物が豊かになればなるほど人間が疎外されてしまっている事実があるということを、私は申し上げたいと思います。こういう便利な世界になってまいりましたし、こういう豊かな国になってまいりまして、何となく日本人の一人一人の心の一番奥深い所には一抹のさびしさといえますか、何かとり残された感じ、孤独感というものを各自が味わっているのじゃないかとまず思います。物も大切だけれども、より大切なものがあるんじゃないかということを、次にお話ししたいと思えます。

世界最高度福祉国・北欧における

一 老人の投身自殺

去年の正月の新聞だったと思います。新聞の一面にこういうことが載っていたんですね。北欧、スウェーデンかデンマークかどちらかだと思いますが、あそこは社会保障が完備して大変有名な所ですね。社会の老人問題なんかいろんな施設ができていて、老後憂いなく生きていくことができる国とされて有名です。そこで一人の老人が身を投げて自殺をしたという事実なんです。しかも、その老人は、一枚の紙きれに一言だけ遺書らしきものを書き残していた。書いてあった言葉は何かといいますが、

「今日も一日、私にだれも話しかけてくれなかった」と一言書いてあったというんです。それで自殺してしまつたわけです。その人はおそらく北欧の社会保障の完璧な国に住んでたんですから、物質的には、そして環境的には、何一つ不足しているものはなかったはずなんです。ただそれでは幸福でなかった、決して幸福でなかった。彼にとつては物よりも大切なものがあつただけけれども、得られなかったわけです。それは一人の人からの友情であろうか、愛情であろうか、何であつたかわかりませんが、その遺書らしきものをみると、友人が欲しかったんでしよう、あるいはやさしい言葉をかけてもらうことが彼にとつては必要だったんでしよう。決して物でなかつたわけです。

わが小学生の自殺

或いは最近小学生の自殺なんてよく聞きます。しかもこれは不思議なことに、学年の始まる頃が多いんですね。小学生、中学生の自殺というのは、新しい学年が始まる頃、非常に単純な理由から起こるのが多いのです。例えば新しい学校へ移ったら友達がいなかったとか、いっしょに遊ぶ人がいなかったとか、人から悪口いわれたとか。今の子どもたちのことですから、食べる物に事欠くわけでもありません。いろんな面で、かつての子どもたちよりも生活上経済

きなものに飢えています。なぜならば、死に瀕している人が最後に言い残す言葉というのは、決して食べ物をもらってありがとうという言葉言葉じゃないんです。自分たちは今まで決して大切なもの、あるいはなくてはならない人のように取り扱われたことは一度もない、人間として取り扱われたことがないというんです。とくにインドなんかですと、カーストといういろんな階級制度、非常に厳密な階級制度があるわけですから、アンタツチャブル（不可触民）の人たちなんか人間として取り扱われないわけですね。ところが今最後の瞬間になって、あなた方は私たちを本当に大切な人間のようにして取り扱ってくれた。かけがえのない人のように親切にしてくれた。こんなにうれしいことはありません。そして最後にサンキューといって死んでいくつていうんです。食べものの飢えて死んでいく人をお世話しているその人が、彼らが飢えているのは食べものじゃない、本当に飢えているのは、人間の愛情だということをごさかんというんです。

(三) 施設を形式的に評価する大学教授に
いう——ここで病んでいるのはわれわれの兄弟姉妹です

またこんなことも言いました。まあ彼女のそういう施設は世界でも大変有名になつちや

つたもんですから、いろんな見学者があるらしく、ある時その施設を見学に来たヨーロッパの大学の教授たちが、まあ皮肉たつぷりに、あなたはこういうことをやっているけれど、こんなことしたって社会を変えることが出来ないでしょう。ただまあ、あたたかい手を差し伸べて何万分の一人の人を救っているけれども、それはちやうど大きな海の中にさらに一滴の水をそそぐようなものであつて、なんら社会に影響を与えるものでもなく、社会を変えていく力にもならない。あたたかも無駄ではないかという言い方をしたわけです。そうしたら彼女は、そうかも知れません。しかし、私はこの町に一人でもこういう人がいる限り、いつまでもこのことをします。なぜならば、ここで病んでいるのは、私の同じ兄弟姉妹、人間だからですと。

(四) 自らのなすべきことを質問した大学教授にいう——お互いに微笑みを交しましょう。世界は変わって来ます

まあその教授たちは彼女と接しているうちにだんだん感化をうけて来て、非常に自分たちが恥ずかしくなつたわけです。そして、最後に、プロフェッサーたちは、それならば私たちは今何をしたらいいでしょうかという質問をするわけです。そして、彼女の言ったことはきわめて単純に、あなたがたは互いに微笑みあつた

らいいでしよう、とこう言つたというんですね。今の社会でもっとも足りないのは、そういう互いの思いやりである。そしてそれは何もあなた方がカルカッタに来てそれをさがさなくても、結構です。その思いやりが必要なのは、あなた方の一番身近な所にきつと必要性がありますよ。あなたの家族を見て下さい。あなたの奥さんは、あなたが思いやりがなくて一人で孤独で悲しんでいるかもしれない。あなたのご主人は、奥さんから顧みられないで、あたたかい言葉を一言もいわれないで、孤独でいるかもしれない。あるいは、子どもたちは親から理解されず、反対に親たちは子どもから理解されなくて、孤独でいるかもしれない、また老人は若い人から理解されないで、孤独でいるかもしれない。あなたのお家の病人は、元気な人から理解されないで、孤独であるかもしれない。その人たちに一言でもあたたかい言葉、あるいは一つの微笑みでもしてごらん下さい。世界は変わってきますと、こう言つたというんですね。

精神の豊かさは物の貧しさを上回る

ですから、そこで私たちが注目したいのは、その物の大切さももちろんわかります。しかし、物よりも、もっと大切なものがあるということ——精神的な豊かさというのは、物の貧しさよりも、上回るといふことですね。精神的な豊か

さというの、物質的な貧しさがあっても、なおありうるということです。

フィリピンのぼろバスの乗客の人情

たとえば、私はもう一つ思い出すのは、あのフィリピンのことです。フィリピンへ行きますと、九〇%から九五%がだいたい貧しい人ですね。まず、町の中を走っている二種類のバスがあります。一つのバスは、とてもきれいなバスで、冷房がついているんです。しかしこれは金持ちたちのためのバスでして、高いから、庶民はだいたいの乗らないんですね。もう一つのバスは、本当にきたないバスで、ガラスの窓も何もないおんぼろバスですね。それからもう一つ、ジープニーといって、ジープにとでもきれいな模様をほどこしたようなのがあって、これは乗り合いバスみたいになっているんです。非常に簡単でして、まあだいたい経路は決まっているんですけれど、どこでも止まってくれるんですね。私も一回乗ったことがあるんです。止めてほしい所で天井をたたくと、運転手が止めてくれるんです。それには人間だけでなく鶏も乗せてくるし、時には豚まで乗せると聞きました。ところがそのまあ貧しい人たちの共感というんでしょうかね。そういうことに対して何も文句をいわないんです。そしてそういうジープニーのような乗り合いバスに荷物を持ってくる

人があれば、座っている人は必ずその荷物を持ってあげるんです。

ぼろバスの運転手、

二時間もかけて他の自動車の故障を直す

それから又ある時こんなことも聞いたんです。私の友人が郊外の方に乗って行った自動車が故障したそうで、そこへそのいわゆるきたない大きなバスが通ったんです。そこで友人は無理してバスに止まってもらい、バスの運転手ですから少しは機械のことはわかるだろうと思つて調べてもらったら、非常に親切な人で、バスの乗客をそのままにして、その自動車の故障を直してくれたといっています。運転手が一時間も二時間もかかって直してくれた間、バスの中で待っていたその乗客たちは、一言も文句を言わず、そしてあたかも当然であるかのように、その車の修理をするのを終わるのを待っていたというんです。そうして運転手も終わったら、ああよかったですねと言つて、さつさと又バスを運転して行ったというんです。ほんとうにそこに美しいものがあります。あそこの町に行きますと、ほとんど見知らぬ人であっても、ちょっと話しかけて友達になると、食事していきますんかといえます。貧しい人たちの社会では、そこへ行っていっしょに食事をする、とてもよろこんでくれるわけですね。そういうような

何か一つの豊かさというもの、貧しい人たちの中のほうに精神的豊かさが本当にあると、私は思うんです。

豊かな国に住む日本人に絶対必要なもの

——内に精神的に高いものを見出す努力、

外に世界万人同胞平等の意識の涵養

特に私たち日本の豊かな国に住む者としては、その物質的な豊かさに酔い痴れるのではなくて、精神的な高いもの、もっと他に価値のあるものを見出していくように努力しなければならぬと思います。そういった意識がないと、この社会の構造の変革、機構を変えていくというようなことすらできないんじゃないかと私は思います。私たちがお互いに人間であつて、兄弟であるという意識を生み出さないと、その貧しい人たちと豊かな人たちとの格差というもののは決してなくなつて行かないだろうと思います。今私たちは山岡先生を中心の一つの研究をしております。それは新国際秩序ということです。新国際経済秩序というようなこともやりますが、国連のほうでそういった一つのプランを出しているわけです。そういったものにそつた機構の改革というようものを押し進めていく場合にも、その基礎となる考え方、すなわち人間みんな同じく平等であつて、一人一人の存在というものは、かけがえのない存在であ

るという意識、そしてそれは白人であろうと黒人であろうと、宗教は何であろうと、文化がどうであろうと、みんな同じようにたいせつな人間であるという意識、この意識の転換がない限り、すなわち私たちの内的な刷新がない限り、いくら機構を云々しても、本当の意味の新しい社会秩序というのは生まれてこないんじゃないかと思います。

まだいろいろと申し上げたいことがありますけれども、もはや時間がございませんので、あとは何かみなさんのご質問ありましたらお答えするといまして、これで一応お話を終わらせていただきます。(拍手)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。